

## 医史学と私

富士川 英 郎

日本医史学雑誌第三十四卷第四号  
昭和六十三年十月三十日発行

こういう題を貰ったが、私の場合は「門前の小僧習わぬ経を読む」というのに近い。

私の父に『日本医学史』という著書があることを、私はもちろん、幼い時から知っていたが、それを繕いて、よくは分らぬながら、あちこち拾い読みしたのは、旧制の中学に入った頃のことであった。ちょうどその頃、私は歴史に強い興味を覚えて、内田銀蔵、三浦周行、喜田貞吉といったような歴史家たちの論著をいろいろ読み漁っていたので、『日本医学史』を繕いてみたのも、そうした興味につながるものであったのだろう。もっとも、鎌倉の父の家の客間の床とこには、しばしば神農や、ヒボクラテスや、張仲景や、吉益東洞などの肖像画がかけられており、また、『春日権現験記』の「疫鬼の図」を模写した絵が壁に額としてかかっていたが、幼い頃からそれらを見て過してきた私は、いわば医史学的な雰囲気の中なかに早くから浸っていたのだと言ってもよいかもしれない。さらに思い出されるのは、毎年秋の天気の良い日になされた父の蔵書の虫干しのことである。私は、大学生になった頃、しばしばこの虫干しの手伝いをさせられたが、当時なお四千冊近くあった古医書をまず八畳の座敷にいっぱい、蒔き散らしたように広げて置き、暫くするとそれをもとの棚の上に積み、また別の本を座敷に広げる。そんなふうにして、全部の虫干しを終えるまで何日もかかったばかりか、その多くが二冊、ないしは三冊で完本となるものであったので、それを棚に積みあげるのに先立って、ちゃんと揃えて置かなければならないのであった。この簡単なようで、実はなかなか面倒な仕事のお蔭で、私は『素問識』とか、『解体発蒙』とか、

『漢蘭酒話』とか、そういう古医書の名を、その内容は知らずに、いつのまにか覚えこんでしまったが、伊沢蘭軒の『蕪斎詩集』などもそのうちによく見かけたものであった。

私は大学では文学部のドイツ文学科に入り、学生時代には主としてドイツの詩や小説や評論などを読んでいたが、その頃、父の蔵書のうちに見つけたものに、一九〇六年から一九〇八年へかけて、ミュンヒェンの書肆から出版された『文学と医学の境界の諸問題』(Grenzfragen der Literatur und Medizin)という叢書の合本があった。私は折にふれて父の書棚からこの書物を取り出して、そのなかに収められていたドストエフスキーやストリンダベリーやポーの病志(Pathologie)を面白く読んだが、これが纏った病志というものを私が読んだ最初であった。ただ、当時の私はまだメービウスのゲーテやニーチェについての有名な病志のあることを知らなかった。

大学を卒業してから一年あまりたった頃、ある日、父がドイツのある医学雑誌——『ミュンヒェン医事週報』であったかと思う——に載っていた論文を私に示して、それを日本語に翻訳せよと言った。それはホッホシュテッテルという人が執筆した「ゲーテの著作に現われた医者」という論文であったが、私のその訳文はやがて日本医史学会の機関誌『中外医事新報』の昭和八年六月号に掲載されたのであった。これは翻訳ではあったけれど、私の医史学に関する最初のささやかな論考であったのである。

昭和十年四月、私は旧制の第六高等学校のドイツ語の教師となつて、岡山市に赴任して、そこで八年間を過し、その後、やはり旧制の佐賀高等学校に転動して、終戦後まで約六年間、この九州の都市に住んでいた。つまり私は、戦後に東大の教師となるまで、旧制の高校で通計して一四年間、ドイツ語を教えていたのであるが、その間、理科乙類のクラスでは、教科書として小説ばかりでなく、しばしば医学や医者に関するものや、自然科学的的人生観が述べられているエッセイの類を使つたりした。理科乙類は第一外国語としてドイツ語を習得する学生たちのクラスで、彼らはその大半が大学の医学部に進学する予定の者たちであつたからである。

当時はヘルムホルツやオストヴァルトなどの通俗的な科学随筆がまだかなりよく読まれていたので、私も理乙でしばしば彼らのものを教科書に使ったが、そのほかにウンガールのコッホやフィルヒョウの伝記や、H・E・ジーグリストの『疾病観の展開』(Die Entwicklung der Krankheitsvorstellungen)という小冊子を読んだりした。この『疾病観の展開』は四〇頁ばかりの論文で、ジーグリストがまだアメリカに移住前に書いたものであるが、これを学生諸君と一緒に読んだことは、私にとってよい勉強となった。同じように印象深く、いまでも覚えているのは、ある年、これも理乙のクラスでゲーテの『植物の変容』を読んだことであり、また、文芸作品では、カロッサの『ドクトル・ビュルガーの運命』を読んだが、これは多くの学生諸君にとって面白い読物であったようである。

昭和十五年十一月に父が没したとき、私はまだ旧制六高の教師として岡山に住んでいたが、昭和十七年に父の三周忌を迎えた頃、私はその医学史に関する遺稿の一部を集めて、『医史叢談』と題して、書物展望社から出版した。父はその生前に『日本医学史』、『日本医学史綱要』、『日本疾病史』を著わしたほか、『中外医事新報』をはじめとしてさまざまな雑誌に、医学史に関するさまざまな論考や随筆の類を發表していたが、それらのおびただしい論文はいちども単行本としてまとめられたことがなかった。私はそのうちから大小の論文三〇余篇を集めて『医史叢談』を編んだが、書類として聞えていた齋藤昌三氏が主宰し、経営していた書物展望社から出版したのにもかかわらず、戦争中であつたせい、造本、装帧ともに予期したほどでなく、それに校正が疎漏で、誤植が多かつたのは遺憾なことであつた。

だが、この憾みは戦後、昭和五十五年から五十七年へかけて、京都の思文閣出版から『富士川游著作集』全十巻を刊行し得たことよつて、ほぼ完全に解消されたと言つてもよい。私は父が死んだ頃から、さまざまな雑誌や定期刊行物などに發表された父の主として医学史に關した論考や雑誌の類を蒐集しはじめ、国会図書館や東大の医学部図書館をはじめとして、諸方で開かれた古書展などにもできるだけだけ出かけていって、それらの論考を写しとつたり、それが掲載されている雑誌を買い求めたりした。そして永年にわたつて、そのようにして蒐集したものを、読書の余暇に、その内容に従つて整理

分類して手もとに持っていたので、『富士川游著作集』を刊行するに当って、その編集にはさほどの手数はかからなかったし、また、他の人を煩わすこともなくてすんだ。この著作集には、父が『日本医学史』、『日本医学史綱要』、『日本疾病史』の三著のほか、いろいろな雑誌その他に発表した、医学史に関する論文のほとんど全部が収められているが、近時、二、三の文化人類学者の論著などのうちに、この著作集がその参考文献のひとつとして挙げられているのがあって、編集者たる私としても喜ばしく思っている。なお、この著作集十巻を編集したことによって、私が自分の医学史に関する知識を大いに広め得たことは言うまでもない。

ところで、少し時期が遡るが、私が森鷗外の史伝『渋江抽斎』、『伊沢蘭軒』、『北條霞亭』をまとめて読んだのは、昭和十年頃のことであった。私はこれによって江戸の考証学派と言われた儒医たちの存在を知り、さらに広く一般に当時の儒者とその生活とに興味を覚えたが、ずっとのちになって、『江戸後期の詩人たち』や『萱茶山と頼山陽』というような書を著わしたのも、そのもとを辿れば、鷗外の史伝を読んで感動したことであつたと言ふことができるのである。

江戸時代には、儒学についての一通りの知識と漢詩を作る素養とが、ひとり儒者ばかりでなく、ひろく知識人たちに一般教養として求められたが、それは医者の場合ももちろん例外ではなかった。そして当時の医者たちのうちには、上述の儒医と言われたような人たちも見い出されたが、一見、儒者や儒学とは遠い存在と見做されがちの蘭方医たちも、その大半は和蘭語を学習するに先立って、儒学の教養をそなえていたのであつて、たとえば杉田玄白、坪井信道、箕作阮甫のような人たちがおびただしい数の漢詩を作っていることによつても、そのことは知られるだろう。従つて当時の儒者と医者との間の個人的関係にも、しばしば非常に親密なものがあつたのである。

私は目下、江戸後期の有名な詩人萱茶山の詳しい伝記を執筆中であるが、茶山は京都で和田東郭に医学を学び、郷里の備後国神辺で暫く医業を行つていたせいもあるが、その交友のうちにはかなり多くの医者が見い出される。その主なる者だけでも、京都の橘南谿、小石元俊、元瑞、新宮涼庭、江戸の大槻磐水、磐里、桂川甫周、伊沢蘭軒、土生玄碩等が挙げ

られる。紀州の華岡青洲と茶山とは面識はなかったが、互いに文通を交わし、青洲の子の雲平が茶山の塾に入ったような間柄であった。その他、広瀬淡窓と医者たち、頼山陽と医者たちの交友関係なども、探索すれば面白い研究のテーマとなるだろう。

儒者と医者との交友関係を調べているうちに、たまたま当該の儒者の平常の健康状態や病気のことが知られることがある。つまりその病志が明らかになるのであるが、病志の研究は、上述した通り、私が大学生であった頃に、『文学と医学の境界の諸問題』を読んだとき以来、少なからぬ興味を覚えたものであった。そしてその後、メービウスの『ゲート』や、クレッチュマーの『天才の心理学』や、ヤスパースの『ストリンドベリーとファン・ゴッホ』などを読み、自分でも「頼山陽の病志」を執筆して、これを『日本医史学雑誌』に掲載したことがあったが、戦後に現われた諸家の論考のうちで私がとくに興味深く読んだのは、野村章恒氏の日夏耿之介と中河與一についての病志である（同氏著『パトグラフィ研究』所収）。

ちなみにパトグラフィは、戦後には一般に「病跡学」と言われているようであるが、私はこの生硬な名称を好まない。「病志」はパトグラフィの直訳であるが、実にびったりとした訳語で、そのうえ、なんとない雅趣がそれにそなわっている。「病跡学」などという名前を考え出したのは、たぶん漢字の美的機能に鈍感なひとだったのだろう。

医学史の領域のうちで、儒者と医者との関係、病志などともに、私が興味をもって読んでいたのは疾病史である。もちろん私は、これに関する諸家の論著を読むだけで、自分の研究というべきものは何もないが、わが国には早くから父の『日本疾病史』や土肥慶蔵先生の『世界黴毒史』などがあって、それらをいわずとも私は面白く読むことができた。戦後には、山下政三氏の『脚気の歴史』や、山本俊一氏の『日本コレラ史』のような卓れた疾病史があり、また、やや通俗的ではあるが、立川昭二氏の『日本人の病歴』その他の著書がある。歴史に現われた疾病とその治療のされ方が、医史学者ばかりでなく、文化人類学者や民俗学者たちによっても、それぞれの立場から取り扱われるようになったのも、戦後の注目すべ



き現象であると言えよう。

欧米人の著書ではジーゲリストの『病氣と文明』、ジンサーの『ねずみ・しらみ・文明』、マクニールの『疾病と世界史』などの日本訳が出ているが、これらの書物はいずれも古代から現代に至るまで、ヨーロッパ全体、あるいは世界全体に広がった流行病の歴史を述べており、それは人類の政治史や文化史の暗い、しかし、拒否することのできない伴奏をなしているのである。

医学史の研究は日本でも戦後にかなり盛んになり、そのさまざまな領域にわたって、さまざまな研究者によって卓れた業績が積み重ねられてきたが、比較的到手薄なのは東洋医学史、つまり印度や中国や朝鮮の医学史の研究だろう。他日、それらの研究がさらに詳細になされ、印度医学や中国医学の、アラビア医学やギリシア医学との交流関係が、いまよりもっと明白にされ、それらを総合的、系統的に、そして有機的に叙述した世界医学史が、誰か卓れた学者の手によって書かれるならばと、門外漢の私はそんな虫のよいことを夢みているのである。

(日本医史学会理事)